

巻頭言

病院図書室 —過去・現在そして未来—

姫路赤十字病院院長
鍋山 晃

病院図書室の歴史を振り返ってみると、一見、時代の流れには無関係に見える図書室も、実は大きな変化を遂げてきたことがわかる。

当院の図書室は、昭和 48 年に図書委員会が発足し、当時の医局の片隅に 1 つの書棚と 1 つの閲覧机が置かれたところから始まって 30 年が経過した。主な蔵書は、教科書的な図書から 250 種にも及ぶ臨床系の医学雑誌へと移り変わり、増え続ける書籍に対応するため 2 度の図書室移転を行い、4 つの書庫を増設した。そして図書室にコンピュータが登場し、Index Medicus や医学中央雑誌の分厚い印刷本で探していた文献が、文献検索システム CD-ROM 版の出現で、迅速に数多く、探し当てられるようになった。さらにインターネットの普及により、無料で文献検索できるデータベースも登場、図書室には不可欠なツールとなった。

平成 13 年 11 月、当院は新築移転し、現在の図書室となっている。新病院は、イントラネットが整備され、院内のほとんどのコンピュータからインターネット検索を行うことができる。それを利用して、現在は、全文が読める電子ジャーナルの導入を試みている。医師だけでなく今は職員すべてが利用対象者となった。

昔の図書室は、医学書を並べていればそれでよかった。しかし蔵書が増え、それらを効率よく利用してもらうために図書を管理する者が必要となり、専門的知識のある司書を配置した。

司書の役割は、医療の進歩とともに変化して

いる。図書の分類・管理といった基本的なことから、レファレンスサービスへと広がり、現在はコンピュータリテラシーが必要とされる。単純な文献検索の援助・代行の業務に代わり、あらゆる情報が氾濫する中で、的確な医学情報を入手する方法を指導する、教育リテラシーも要求されている。

来年度から始まる新医師臨床研修制度には、臨床研修に必要な施設として「インターネット環境が整備され、文献データベース検索や教育用コンテンツの利用環境が整備されていること」と挙げられ、問題対応能力を身につけるために EBM の実践ができるようになってきている。

また近ごろは、患者アドボカシーが注目され、患者中心の開かれた医療を実現しようという考え方がでてきている。患者さん自身が病気について正確な情報を知るということである。

つまり、これからの病院図書室は医療者に対しても患者さんに対しても有用な図書室にならなければならない。

昨年、当院は医療機能評価を受審し、図書室は、最高の評価を得た。これは大変喜ばしく、今後の図書室運営に大きな励みとなった。

医療情報を如何に確実に入手できるようにするか。図書室の機能をどう発展させていくかは各病院におそらく 1 人しかいない司書の技量にかかってくるであろう。これは病院図書室にとって永遠に続く課題であり、図書室担当の方々にはさらなる研鑽をお願いし、利用者の知識・技術の向上に貢献していただきたいと考える。